

老球の細道26

『失うことで貴重な何かを得る』

会津バスケットボール協会理事長 室井 富仁

バスケットボールの試合では「勝利」と「敗北」はつきものである。何らかの大会においては優勝するチームはたった1チームで、それ以外はすべて敗北のチームとなる。しかし、優勝するようなチームも選手も、最初から勝ち続けているわけではなく、皆、敗北を経験しながら、敗北をうまく使いこなしながら最後に勝利を得ている。失敗(敗北)することで、試行錯誤して、進歩し続ける方法を学び、長い時間をかけて失敗の意味を正しく理解できるようになる。まさに、失敗は成功のもとなのである。

記録に残る選手、チームは皆「敗北によって勝利が得られる」ということを理解している。自分の失敗を、未来の成功に向かって積み上げていく「踏み台」としていかしている。あのマイケル・ジョーダンも、高校2年生のとき、身長が低いことを理由にチームのメンバーから外された。しかし、くさらず、父親の励ましを受けながら、再び挑戦し、さらに強い選手に成長できた。もし、メンバーから外されなかったら、伝説の史上最高のバスケットボールプレーヤーは誕生しなかっただろう。

アーチェリーでは、一流の射手こそ、いちばん失敗を経験しており、一流選手こそ、もっとも多くのミスをしていると言われる。一流選手は、失敗や敗北を自分の学習と成長のために必要な要素だということがわかっている。そして、そこに学ぶべものがあることを知っている。結果の出ない選手、チームのほとんどは勝利の可能性が見え始める前にあきらめてしまう。結果を出す者、チームは失敗を大切にす。勝者はだれよりも多くの失敗を経験していることを忘れてはいけない。

失敗(敗北)に耐え、失敗から多くのことを学ぼう。失敗をして自信を失うことなどない。失敗を恐れず挑戦する勇氣と、失敗することが認められている環境(チーム)があれば、いつかは必ず成功する。私は失敗を恐れるジュニア世代の指導で常に話す。

「ミスを怖がるな。女の子はもともと“ミス”なんだから。男の子は“ミスッター”なんだから」

最後に『クリエイティブ・コーチング』(大修館書店)より一言、二言。

*すべての身体技能は、それがいかに高度なものであれ、つねに試行錯誤(挑戦と失敗の繰り返し)によって完成していく。赤ん坊の直立歩行を覚えるようす、自転車の乗り方を覚えるようすが良い例である。何度も何度も転んでは立ち上がって覚えていく。

*スポーツでも人生でも、常に成功し、好成績を残せる者など一人もいない。NBAしかり、日本のプロ野球しかり、全勝優勝などありえないし、同じチームがずっと優勝し続けることもない。勝つときもあれば負けるときもある。人間がやることである。浮き沈みがあるのは当然とことである。

*失敗は破滅でも絶望でもない。落ち込んでかまわない。全力で戦った結果であれば、すばらしい人生経験の一部であるにとらえればよい。本当の失敗、唯一の失敗といえるのは、「成功のために挫折がいかに重要であるかを理解しようとしないうこと」である。

*失敗を避けては通れない。「失敗する者」と「いつか失敗する者」のたった二種類だけが存在する。すべての技術は失敗を通して進歩する。失敗もまた進歩の過程の一部である。